

第31期 上級日本語特別コース (2011年10月～2012年9月)

初 山 洋 介

第30期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、5カ国、5名（韓国：1名、スウェーデン：1名、中国：1名、ブルガリア：1名、ベトナム：1名）であった。また、10名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習 (10月～4月)

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』『現代日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』（いずれも名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

(2) 応用会話 (10月～4月)

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、社会における様々な場における会話力（表現力、運用能力）を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを作成し、使用した。

(3) 入門講義・特殊講義 (10月～7月)

日本に関する基礎知識を身に付けること、レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして、10月～2月（前期）および4月～7月（後期）の期間、それぞれ4つの分野の入門講義を14回（各90分）行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」

「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」であった。学生は、前期は4科目のうち2科目以上を選択、後期は4科目のうち1科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義（必修）として「音声学」（90分×7回）を行った。

(4) 作文（レポートのための基礎訓練）（1月～4月）

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」「論文で使われる言葉」などについて学習した。

(5) 発展読解 (10月～4月)

発展読解として、「精読」（教科書の読解教材に代わるもの）、「新聞読解」、「問題付き読解」（生教材に読解の手助けとなる問題を付したもの）、「本の読解」（エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択）、「特別読解」（学習が、新聞などから自分で記事を見つけ、授業でも教師役をする）などを行った。

(6) スピーチ (10月～7月)

自国の紹介、自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを行った（1人、1回、10分程度、スピーチ後に質疑応答）。

(7) レポート (1月～7月)

学生各自がテーマを決め、教員の個別指導のもとでレポートを作成した。分量はA4、20～50枚程度であ

る。なお、今期も、「論文」「調査報告」「随筆」「創作」という4つのカテゴリーの中から、学生が1つを選んで取り組むこととしたが、最終的に、全員が「論文」を執筆した。研究成果は『2011～2012年度日本語・日本文化研修生 レポート集』（203ページ）として発行した。また、中間発表会（5月、発表：20分／質疑応答：10分）、最終発表会（7月、発表：25分／質疑応答：5分）を実施した。レポート（論文）の題目は以下の通りである。

1. 李ウンソル（韓国）「平安時代の衣服の色彩感覚 - 『枕草子』を読んで -」
2. エフゲニ・ゲオルギエフ（ブルガリア）「日本語における男女差」
3. グエン・クオン・クオク（ベトナム）「日本企業の接客サービス-日本マクドナルドを中心に-」
4. 姜慧瑛（中国）「「る言葉」について-接尾語「る」をつけることによる意味の変化-」
5. ヨセフィーン・ケッテネル（スウェーデン）「J-ポップとJ-ロックの歌詞で使われている外国語」

(8) 総合演習（5月～7月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、総合演習を行った。教材は新聞・雑誌の記事やテレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を行った。

テーマは「麺の都としてのなごや：この地域の特産物（麺とやきもの）を知り、リトルプレス（ジン）で表現しよう」「ことばで伝える、ことばで遊ぶ」「日本人とスポーツ：心技体の世界」の3つである。各テーマの実施期間は1～3週間である。

なお、「麺の都としてのなごや：この地域の特産物（麺とやきもの）を知り、リトルプレス（ジン）で表現しよう」では、2つのグループに分かれて、調査・インタビュー等を行い、リトルプレス／ジンを作成した。リトルプレス／ジンは、『2011～2012年度日本語・日本文化研修生 レポート集』に掲載した。調査担当者、リトルプレス／ジンのタイトルは以下の通りである。

- (1) ヨセフィーン, ウンソル, ジャン

「麺探偵 Girls:名古屋名物の麺料理のおいしさを探る」

- (2) クオン, エフゲニ

「この店 何の店 気になる店」

(9) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～7月）

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして、「漢字テスト」（20回）を行った。また、漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」（4回）を実施した。

(10) その他

以上に加えて、独話練習、討論会（ディベート）、ことばのクラス（ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム）なども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本：異文化を通じた日本理解」にも参加した。

(11) アンケート

2012年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて、アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	1人	3人	1人

(12) 今後の課題など

まず、教科書（上記参照）について修正すべき点が明確になり、この1年で修正作業を完了した。さらに、改訂版を発行することが決まり、来期からは改訂版を用いて授業を行う。

また、ここ数年、「総合演習」のテーマの1つとして、地元の産業・文化について取り上げている。今年度は、上記の通り「麺の都としてのなごや：この地域の特産物（麺とやきもの）を知り、リトルプレス（ジン）で表現しよう」と題して、日本文化・日本事情についての多角的な学習、日本語を用いる多様な活動を行った。また、昨年度と同様、「リトルプレス／ジンの作成」を課題としたが、学習者は大変熱心に取り組み、リトルプレス／ジンの出来栄も期待以上であった。来年度以降も、テーマ、方法などを工夫して、この種の総合演習を継続していきたい。

最後に、今期のこのコースの学生数は5名であったが、ここ20年ほどで最少である。より多くの留学生にとって魅力のあるコースとするためには工夫の余地が

あると思われるが、まずは、このコースの内容を正確に知ってもらうための広報活動が必要であると判断した。具体的には、「コースガイド」を全面的に改訂し、

このコースの良さ・魅力が以前よりも伝わるものとした。